

プログラム

木琴小協奏曲

黛 敏郎

アレグロ（お囃子風）

アダジェット（静かな追分け風）

プレスト（追い立てられるように）

シャコンヌ

J・S・バッハ

マリンバ・ソナタ

P・タンナー

アレグロ・コン・プリオ（生き生きと速く）

アンダンテ・ソステヌート（ほどよくゆっくり、音を充分に保って）

モルト・ヴィヴァーチェ（非常に生き生きと）

<休憩>

楽しい小品集

編曲 織田 英子

ベルシャの市場

大きな古時計

カチート

ベサメムーチョ

ティコティコ

マリンバとアルトサクソフォンの為の ディベルティメント

湯山 昭

ハンガリア狂詩曲

D・ポッパー

1987年1月10日(土) 3:00PM ノバホール

マリンバ：明瀬 由武 ピアノ：戸部 典子

アルトサクソフォン：小串 俊寿 作曲：織田 英子

ごあいさつ

明瀬 由武

本日はお忙しいところをお越しくださしまして、誠にありがとうございます。私が「一生の楽器」と決めたマリンバをたくさんの方に紹介し、好きになっていただこうと思い、本日の演奏会を開きます。

マリンバのための曲というと難解な現代作品が多いのですが、本日は比較的親しみやすい現代曲に加えて、バッハのバイオリン曲、そしてポピュラーな曲もたくさん用意しております。どうぞ最後までごゆっくりお楽しみください。

この場を借りまして、ご出演くださいました演奏者の方々、ポスター制作の古山浩一さん編曲、曲目解説の織田英子さん、そして会を催すためにご協力くださったたくさんの方々に心よりお礼申し上げます。

曲目解説

作曲家：織田 英子

第 1 部

♪ 木琴小協奏曲 黛 敏郎

邦人作品とひとくちに言っても、作曲された年代から作風まで、多種多様です。特にこの 20 年間はジャンルの境い目が混沌としながら発達してきているのですが、黛さんの音楽は中でもいつも新鮮で、若い頃に書かれた作品でも、聴くたびに新しい発見と感動を見出すことができます。そしてそれは、日本人が西洋音楽をやることについてのギャップやハンディ、それらをどう好転させていくかという宿命の大問題に、ひとすじの光を与えているようです。

この木琴小協奏曲にはちょっと面白いエピソードがあります。作曲を依頼した平岡養一氏が、出来上がってきたこの曲を見て、「好みに合わない」と演奏するのをやめたそうです。ですから、初演はそれからすいぶん後に別の奏者によって行われたということです。

♪ シャコンヌ J.S. バッハ

「シャコンヌ」はスペインに起こった 3 拍子の舞曲で、2 拍目に独特のアクセントをもっています。以前、ギタリストのアンドレ・セゴヴィアの弾く、バッハのシャコンヌを聴いたことがあります。いかにもスペインに起源をもつ舞曲だということを感じさせてくれるような、香り高い演奏でした。バッハのシャコンヌはもともとバイオリンのために書かれたものですが、この話でもお分かりのように、他の楽器でも演奏されることが多い曲です。

いつだったか、明瀬さんとバイオリンとマリンバの演奏法の違いについて語り合っていたとき——その時はグレングールドの弾くバッハの「ゴールドベルク変奏曲」を聴きながらだったのですが——「ピアニストがピアノのために書かれた曲を弾いてもこんなに個性的なのだから、(シャコンヌも) バイオリンに似せようと思わなくてもかまわないよね」と自分に言いかけせるようにおっしゃっていたのが心に残っています。

♪ マリンバ・ソナタ P. タナー

マリンバのために書かれたソナタというのは非常に珍しいのですが、それはソナタ形式という厳格な書式と、ともすれば軽妙洒脱に見られがちなマリンバという楽器のイメージが、ソナタ作品の数を少なくしている原因かもしれません。私などは「マリンバ」というと、すぐ打楽器——叩く——というふうに関連してしまいがちですが、タナーの場合、トレモロを非常に効果的に使い、管楽器や弦楽器よりも息の長いフレーズを演奏するメロディー楽器として扱い、しっかりした構成の上に、音楽的にもすぐれた作品になっています。

第 2 部

♪ 楽しい小品集 編曲 織田 英子

この 5 つの小品は、彼が演奏してみたい曲を編曲したものです。以前、コスタリカに行かれた時のレコードをお借りしたことがあります。明るいらズミックな感じがとても気に入ったので、カチート、ティコティコなどは中南米風に編曲してみたつもりです。

♪ マリンバとアルトサクソフォンの為のディベルティメント 湯山 昭

湯山昭さんは、子どものために数多くのピアノ曲や合唱曲を書いておられ、ご存知の方も多いと思います。みずみずしい感覚を失わない和音やメロディーは、子どもも大人も楽しい気分にさせてくれる魔法のように響きます。しかし、彼の作品の中に「ディベルティメント」という素晴らしい作品があることはあまり知られていないでしょう。サクソフォンもマリンバも、躍動性に富んだ楽器で、その特性を生かした作曲をするには、非常に高度な技術を必要とするのですが、湯山さんは見事に互いの個性をぶつけるように引き出され、純度の高い芸術作品に仕上げられています。でも、ちょっと目をつぶってみてください。——音が色になり、絵になる——そんな湯山さんの子どもの曲に見られる風景がやっぱり浮かんでくるでしょう？

♪ ハンガリア狂詩曲 D. ポッパー

私の師事していた作曲の永富先生が、パリのレストランで聴いたジブシー楽団の話をしてくださったことがあります。「何人かの大人に交じってひとり、1 2・3 歳の男の子がいて、上手なバイオリンを弾いているんだよ。曲の最後の部分、だんだんテンポが速くなっていくに従って、そのテンポに乗り遅れないようにして後打ち（伴奏部分の弱拍のみを演奏すること）をやるんだ。その子は後打ちの名手でね、お客さんもそれを知っていて、曲の終わりのテンポの速いところに来るのを今か今かと待っている、そんな感じだった」と。私はその話を聞いて、煙草のけむりがもうもうと立ち込めて、西日の入る場末のレストランの喧騒を想像し、それからジブシーバイオリンの少年はサーカスの少年みたいだ、と思って少し悲しくなりました。

ポッパーのハンガリア狂詩曲は、あまり有名ではありませんが、曲中にリストの同名のピアノ曲と同じ主題が用いられていて、聴いたことがある方もいらっしゃるでしょう。